國學院大學学術情報リポジトリ

Exploring the Basis of Workers' Education in Simone Weil

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Sato, Noriko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000776

シモーヌ・ヴェイユの労働者教育の基盤を探る

佐藤紀子

1　はじめに—ヴェイユの労働者教育の中枢にあるのは美である

シモーヌ・ヴェイユ（1909-1943）は生涯をつうじて労働者教育と向き合いつづけた。

高等師範学校の準備級においてアランのもとで哲学修行に励んだ10代においても、高等師範学校を修了し、各地のリセで哲学教師として働きながら労働組合運動に積極的に参与していたころも、労働者の解放を謳うあらゆる政党・集団への信頼を捨てる契機となった1932年のドイツへの視察旅行後も、革命幻想を捨てたのちに本格的に労働について論じた「自由と社会的抑圧の原因をめぐる考察」（1934）を書いていたときもその姿勢に変わりはない。1934年から35年にかけてヴェイユは哲学教師を休職し、身分を隠して工場就労につく。その際に心底味わった労働の隷属性に心身ともに打ちのめされた後はもちろんのこと、かつてのサンディカリストの同志たちを驚かせ、その後のカトリシスムへの接近と労働の隷属性の霊的な意味づけを準備する三回にわたる霊的体験(1)後も同様だ。1940年のナチス＝ドイツによるパリ陥落を皮切りに、ユダヤ系の出自をもつヴェイユ一家は非占領地域を転々としながら亡命生活を送らざるをえなくなる。その際に得たドミニコ会のジョゼフ＝マリ・ペラン神父や詩人ジョー・ブスケ、『カイエ・ドゥ・シュッド』誌周辺の人びととの出会いをつうじて、労働の隷属性を不幸とむすびつけながら「超自然的なもの」や宗教性を帯びた言説のなかで労働の霊性について深めていったころも、農民哲学者ティボンや亡命先でヴェイユが従事したさまざまな農業従事者たちとの出会いにおいても、ド・ゴールの「自由フランス」に参加すべくイギリスに渡り、のちの『根をもつこと』となる解放後のフランス再建構想を練っていたころも、ヴェイユは一貫して労働者教育に言及した。

ヴェイユの生涯を概観すると、哲学教師、平和主義者、コミュニスト、社会主義者、革命的サンディカリスムの闘志、神秘思想家、カトリックへの傾倒者などさまざまな顔をもつ一方で、労働者教育という面においては首尾一貫していたと

いえる[2]。ヴェイユの生涯や時々の社会情勢に沿って文脈上の変遷をたどりつつ迎えたヴェイユの労働者教育の集大成は、ヴェイユの死後、カミュの手に渡りガリマール社のエスポワール叢書から刊行された『根をもつこと――人間存在に対する義務の宣言のためのプレリュード』だといえよう。イギリスのアシュフォードのサナトリウムで34年の人生を閉じる直前まで書きつづけたこの草稿には、ヴェイユにとって当時の段階でもっとも最良かつ実現可能とみられた労働の在り方が検討される。

『根をもつこと』では、度重なる分断に傷ついた人間の魂の救済が論じられる。ヴェイユによると、分断をもたらしたものは金銭と教育である[3]。賃金というわかりやすい尺度により、労働者は「働く肉体」という資格だけでお情けで存在を容認されるにとどまり、わずかな小銭を稼ぐために全身全霊をあげて働くことが労働者の「必然」とみなされる。労働における作業はもはや自律性を失い、出来高と達成率という容赦ない尺度によって構成された単調なリズムの繰り返しになる。その繰り返しは秩序や均一性をもたらす美的な調和とは程遠く、時間を細切れにし、伝承されてきた労働の社会・文化的文脈から人間を切り離す。教育は試験という形でこの賃金体制に寄与し、試験の結果が悪いから低賃金の仕事にしかつけないというように、賃金と教育が労働における懲罰の符牒となっていく。敬意を払われることなく、出来高払いの労働に疲労困憊する労働者の姿を見つづけ、その過酷さを実際に体験したヴェイユは端的に現代の社会問題とは「労働者が移民になったこと[4]」だと看破し、その不幸を徹底的に見据えた労働者教育の構築をめざした。

こうした労働者の根こぎに対してヴェイユが試みた労働者教育は、労働を懲罰として捉えるいっさいの見方に対する異議申し立てである。労働はみずからが犯したなんらかの罪に対する懲らしめとして与えられるのではない。労働が人間に尊厳をもたらし、労働が人間にとって世界との直接的な関わりとなり、労働が世界に根づく感覚を人間にもたらす、そのような労働者教育をヴェイユは構想した。ヴェイユは「労働は牢獄の一種ではなく、この世界と他の世界との接触である[5]」とのべ、初めて妊娠した若い女性がお腹の子どものために産衣を縫う作業の例を挙げて説明する。お腹の子どものために産衣を縫う女性は、作業としては産衣を縫うことにすべての注意を向けているが、同時にまだこの世に生まれていない子どものことを想っている[6]。このように労働とは、現在行っている作業がその作業そのものではないけれども現在行っている作業の魂の糧となる別の世界とつながるものなのである。達成率に到達しなければ給料がさっぴかれるような懲罰が労働の糧になるはずがない。むろん度重なる戦争で飢えた人びとをプロパガンダの陶酔で労働に向かわせる、そのような虚言も労働の糧となるはずもない。懲罰も虚言も魂を蝕む毒となり、恐怖や陶酔へと人びとを容易におとしいれ、思考を麻痺させる。恐怖や陶酔をもたらす懲罰や虚言は人間を瞬時に支配する巨大な

力なのである。ヴェイユはこの力がいっさい混じることのない美と善を労働の霊性として自身の労働者教育の肝にすえた[7]。

本論稿では、三つの支点にしぼって、ヴェイユの労働者教育の基盤の一端を探ってみたい。まず一つ目は、ヴェイユの労働者教育を準備したものとして、ヴェイユを労働者教育に導いた先達たちを確認する。フランスではフランス革命以降たびたび労働者教育が実施されてきた。民衆大学、労働取引所（Bourses du travail）[8]、民衆の家、社会的課題に取り組む各種連盟や同盟などの多様な取り組みがあり、ヴェイユ自身もこれらのいくつかに実際にかかわった。二つ目は、ヴェイユが労働における隷属性を深く身に刻み、不幸の問題へと思索を深めていく契機となった工場就労をとりあげる。三つ目は、カトリック青年労働者連盟（Jeunesse Ouvrière Chrétienne：以下JOC）をとりあげる。その名のとおり、サンディカリスムとは対極にある保守的なルーツをもつ団体であるが、『根をもつこと』においてこの団体だけが唯一労働者の不幸に目を向けたとヴェイユは評価した。労働者を真に育む場を探しつづけたヴェイユがJOCになにを見出したのかを確認する。

2　ヴェイユの労働者教育を準備したもの

ヴェイユと労働者とを本格的につなぐ出会いは高等師範学校準備級時代にはじまる[9]。アランとアランを信奉する人びとに導かれ、準備級時代の同級生とともにヴェイユは労働者との関わりを深めていった。このとき育まれたネットワークがヴェイユの労働者教育の礎でもあり、はじまりといえよう。ヴェイユの労働者教育に道筋をつけたこの初期のネットワークを三つに大別し、その概観を確認してみたい。

一つは、アランのために『リーブル・プロポ』誌を用意したアレクサンドル夫妻に端緒をもつネットワークである。夫妻はフランス中部に位置するル・ピュイのリセに哲学教師として派遣されることになったヴェイユに、ル・ピュイから三時間ほど離れたサンディカリスムの要所サン＝テティエンヌの『ラ・レヴォリュシオン・プロレタリエンヌ』誌周縁の活動家たちを紹介した[10]。そのなかに、その後のヴェイユにふかく影響を及ぼすことになるテヴノン夫妻がいた。小学校の教員でもあり、ロワール県労働組合評議会の副書記でもあった夫のウルバン・テヴノンをつうじて、ヴェイユはサン＝テティエンヌの石炭採掘所の労働者たちと出会い、また、テヴノンが一員であった労働取引所の労働者のための学習サークルに参与した[11]。テヴノンとの出会いはヴェイユの工場就労を実現するうえでも、労働取引所という当時のサンディカリスムの中心地にヴェイユを導いたという点においてもきわめて重要なものとなった。

二つ目は、民衆大学のネットワークである。ヴェイユはアランと第一次世界大

戦で戦友だったリュシアン・カンクエによって設立された民衆大学で、ヴェイユとおなじく準備級のアランの生徒で同級生だったルネ・シャトー、ジャック・ガニョショー、ピエール・ルテリエらとともに、「社会教育グループ」をつくり、労働者教育の実践にたずさわった(12)。フランス国営鉄道のセーヌ左岸線の鉄道員だったカンクエは組合員として活動しており、職場の同僚の昇進試験の準備を目的として民衆大学を創設した。パリのファルギエール街の市立学校の教室を借りて開校されたこの民衆大学にヴェイユは熱心にたずさわり、ヴェイユの兄アンドレも数学の授業を担当した。

三つ目は、カーニュ時代の同級生ピエール・ルテリエとの出会いである(13)。ルテリエはヴェイユが手本とするレオン・ルテリエ（1859-1926）の末息子であった。レオン・ルテリエはノルマンディーの農夫の子として生まれ、デカルトさながらに16歳のときに水夫となり世界中で見聞を広め、30歳ころにアランの敬愛する師であるラニョーの忠実な弟子となった人物である。ポール・デジャルダンが中心となり1892年に結成された「道徳的行動のための同盟」の最初の12使徒のひとりでもある。この同盟はレオ13世の回勅「レールム・ノヴァールム」に刺激を受け、倫理の刷新と社会の道徳化をめざし、社会と直接的に交わり、社会に開かれた使徒的在り方を模索するためにつくられた。レオン・ルテリエは社会における使徒的役割を果たし、人との間にも壁をつくらず、人を助けることを厭わなかった。ヴェイユは18歳のときに前年になくなったレオン・ルテリエを偲んで小文を残している。裕福な若者であれ、問題を抱えた若者であれ、反抗的な労働者であれ、だれに対しても魔術的な力をもたらし、人のために誠実に生きるルテリエを讃えて、「彼の眼には、労働が懲罰として神によって課された必然性に映ったことはなく、彼自身にとっては社会に対する義務であり、他者にとっては救いであった(14)」と記している。労働の本質に社会に対する義務を置き、他者のために生きたレオン・ルテリエの生き方はヴェイユにとって人間としての理想形であり、労働者と向き合ううえでのひとつの模範となった。

さて、ヴェイユがかかわったこの三つのネットワークをあらためて振り返ると、社会・政治的な区分で考えるならば各々相反する流れであることがわかる。テヴノン夫妻に連なる第一のネットワークはヴェイユにサンディカリスムの潮流をもたらした。『ラ・レヴォリュシオン・プロレタリエンヌ』誌を主宰したピエール・モナットはフランス共産党から除名された組合主義者であったし、同誌のヴェイユの記事を読み、自身が主宰する『ラ・クリティック・ソシアル』誌への寄稿をヴェイユに依頼したボリス・スヴァリーヌもフランス共産党創立者のひとりだったが、トロツキーとともに共産党から追放された人物である。スヴァリーヌはのちにトロツキーからも離れ、全体主義的なスターリン体制やソ連の官僚主義を批判し、あらゆる党派性から自由な労働者運動をめざした。アナルコ・サンディカリスムの代表的な人物といえる。一方で、第二のネットワークである民衆大学は、

かつてドレフュス事件後の第三共和制期の共和派急進派が主となり、急進派の知識人たちによる反教権的かつ世俗的な教育の牙城となった場でもある。理性と個人の自由な思考に依拠する民主的な立場を占め、伝統的なカトリシスムはもちろんのこと、社会主義とも、サンディカリスムとも、共産主義とも一線を引いた。第三のルテリエやルテリエの師であるラニョーに代表されるネットワークはカトリック知識人により主導され、他の二つのネットワークとは異なる労働観を有していた。労働と社会の関係について、共和派の世俗化政策の影響を多分に受けつつも、人間社会の進歩とは切り離された「永遠性」や「神的なもの」の視座をプラトンやスピノザ、カントらの哲学のもとで共有していた。ヴェイユの思想を代表する「権利に先立つ義務の観念」や、「超自然的なもの」との関わりを準備したといえよう。

最後に、ヴェイユがテヴノンとともに「学習サークル」のメンバーとして実際に労働者教育にたずさわった労働取引所についてふれておきたい。フランスでは、1791年にル・シャプリエ法によりコルポラシオンが解体されてから、1884年の職業組合法の制定および1901年の結社の自由法まで中間団体が否定されてきた歴史(15)がある。そのような背景のなかで、1887年に共済事業、職業あっせん、失業補填、教育事業、統計事業、ストライキの組織化などを目的とし、自治体単位で労働取引所が設立された。とはいえ、フランス国内では個人主義が根づき、国外では社会主義思想やマルクス主義、共産主義など新たな思想潮流が生まれていた。労働者の協働的な運動が求められていたが、困難な時期での船出であった。それでもフェルナン・ペルティエに率いられた労働取引所は党派性を排し、反ゲード派を吸収しながら多様で雑多な思想的潮流を包括しえた。労働者の自主自律を重んじた点が労働取引所の特徴のひとつとして挙げられる。労働者の自律性を支える土台として、労働者の文化構築のための教育活動に着目し、図書館、技術講座、職業教育、思想教育などの労働者教育事業に力を入れた。ヴェイユが実際に労働取引所に関わったのはわずか２年程度にすぎないが、労働取引所が重んじた労働者の自主自律性や、労働者独自の文化の構築構想にヴェイユが直にふれたことは指摘しておかねばならない。

ヴェイユが生涯のさまざまな場面で行った労働者への教育的介入もまた、労働取引所の理念と同様に、労働者の独自性をもっとも重んじるものだった。労働者教育のなかに既存の教育体制を安易に転移する策を徹底的に避け、労働者の現状そのものに目を向けた。ヴェイユのこの構えは、工場就労をへたのちの1936年にブールジュの工場長にあてた手紙のなかによく表われている。「教育の第一原理とは、子どもであれ、大人であれ、だれかを高めるためなのであり、なによりも、その人の目線に立ってその人を高めるのでなければなりません。このことは成長をはばむ主たる障害が屈辱的な生の条件にあるときには100倍の真実を有するのです(16)」。ヴェイユの労働者教育におけるこの構えは、労働者そのひと自身の今

という現状に目をむけつづける透徹した決意であり、徹底した方法論となる。高等師範学校準備級時代にはじまるさまざまなグループでの経験と出会いは、ヴェイユのこの構えを育むと同時に実践のなかでに磨きあげたといえよう。

3　ヴェイユの労働者教育を決定づけた工場就労――不幸についての分析

つづいて、ヴェイユの労働者教育を決定づけた労働の隷属性について確認していきたい[17]。1934年６月20日、ヴェイユは個人的な研究の準備のために教職を一年間休職し、「自由と社会的抑圧の原因をめぐる考察」を執筆するとともに、同年12月４日、スヴァリーヌの友人でアルストン社の工場長であり代表取締役だったドトゥーフの協力のもと、同社に未熟練工として雇われ、念願の工場就労に身分を隠してついた。世界的な不況のただなかでの工場就労だった。不明瞭な指示系統、扱い慣れない工作機械、作業ごとに定められた達成率、仕事の割り当てをめぐるいさかい、ひどい頭痛、疲労困憊する身体、永遠に明日が来ないように願う日曜の夜。こうした工場就労にともなう肉体的な疲労と精神的な痛みは労働者の権利要求へ昇華されるどころか、沈黙と服従を労働者にもたらす。工場就労によって得たこの労働の隷属性がヴェイユの労働者教育の基盤となっていった。

ヴェイユは1935年にアルベルチーヌ・テヴノンにあてた手紙のなかで、みずからの運命を唯々諾々と引き受ける家畜の従順さになぞらえ、工場就労における奴隷状態の原因をつぎのようにのべている。

> この奴隷状態にはふたつの要因があります。スピードと無数の指示（ordres）です。スピードは「達成率に到達する」ことを目標とし、達成率に応じて動作から動作を繰り返さなければならないわけですが、達成率は思考よりもはるかに速いスピードで、考え直すこと（refléxion）だけでなく、夢想することもゆるしやしません。機械のまえに配置されると、一日八時間、魂も思考も感情もすべて殺さなければならないのです。腹立たしいし悲しいし屈辱的でも、怒りも哀しみも屈辱も飲みこんで、自分の奥底にぐっと押しやらなければなりません。達成率を遅らせるからです。指示。工場に入った時刻を打刻してから工場を出る時刻を打刻するまで、ひとはどんな指示でも受け入れることができます。ずっと沈黙し従わなければならないのです。指示は実行するにはひどく骨が折れることも危険であることもありうるし、実行不可能でさえありうるのです。あるいは、ふたりの職制が矛盾する指示を出すこともあります。それでも、沈黙し屈服しなければなりません[18]。

生産効率を最大限にあげるために算出された達成率（cadence）に追い立てられる工場就労のなかで、指示（ordres）は注文であると同時に絶対的な命令とな

る。指示に従わなければ達成率が落ち、達成率が落ちれば出来高が低くなるのだから、出来高低下をきらって労働者みずからがその指示に従っているわけだが、工場内での時間がもはや自分のものではなく、指示に基づいて配分されるがゆえに指示は絶対的命令のごとく作用する。工場のなかでは、時間は勤務時間としてタイムカードに打刻されたものへと変容する。入勤の時刻が打刻されると、勤務時間は達成率にもとづくリズムで支配され、みずからの作業工程を振り返ることであれ、つらさから逃れるための妄想であれ、一瞬たりとも人間のリズムに依拠することはない。ひとつひとつの指示は自分の時間が自分のものではないことを痛感させ、複数の指示が出たとき、たとえそれらが両立不可能な指示であっても、一瞬の躊躇が達成率の低下を招くがゆえに職制にたずねることすらせずに（たずねるという発想すら浮かばずに）、結果の不首尾も含めて、絶対的な命令のごとく唯々諾々と服従する。ヴェイユはこの屈辱と服従の体験から、しだいに日常生活も含めて「自分はいかなる権利も有していない[19]」という感覚に襲われていった。

この奴隷の刻印、労働の隷属性の刻印こそがヴェイユの労働者教育を深化させていくことになる。上述の手紙の内容はマルセイユでの亡命中の1942年に、ペラン神父の依頼により書き直され、「工場生活の経験」として『経済とヒューマニズム』に掲載された[20]。そのなかでヴェイユはなぜ唯々諾々と指示に従い、屈辱に沈黙せねばならないのかについて、アルベルチーヌへの手紙ではまだ出てこなかった労働者の不幸に言及し、その理由をこう説明する。「工場内での労働者の不幸はなおのこと神秘にみちている。労働者自身には、このことについて書くことも話すことも、振りかえることすらほぼ不可能だ。不幸の最初の効果が思考が逃げ出すことだからである。思考はみずからを傷つける不幸について考えたがらない[21]」。

人は不幸を思考することができない——。この発見こそヴェイユの労働者教育の鍵となる。不幸を思考することができないのは、疲労が招く思考力低下や時間の不足に由来するのではない。思考が不幸を対象化しようとしても対象にすべきもののない空虚が相手だからだ。この労働の隷属性もたらす空虚について、ヴェイユは先の「工場生活の経験」とほぼ同時期の1941年の６月にやはりペラン神父に依頼されて書いた「隷属ならざる労働の第一条件」においてこう表現している。「努力をはじめて、１か月、１年、20年と過ぎた最後の日が、初日と同じ状況にあるということに気づかされる状況は奴隷と似ている。所有するもの以上に望むことも、善を得ようと努力することも不可能だという点において似ている。ただ生きるためにだけ努力をする。／このとき時間の単位は１日である。この時間区分のなかでぐるぐる回る。壁と壁を跳ね返るボールのごとく労働と休息の間を揺れ動く。食べる必要があるというだけの理由で働く。一方で働きつづけるために食べる。そしてまた食べるために働く[22]」。

工場就労をへて、労働が有する隷属性、不幸、空虚といったヴェイユの思索の

中心概念が導き出されていった。この空虚を虚言で埋めることなくいかに癒すのか、これがヴェイユの労働者教育の根本的な問題となる。合理化[23]の名のもとに、テイラー式の人間科学にのっとって工作機械の配置、人員配置、時間配分、作業工程、給与計算など分業の諸条件が完璧なる計算で導きだされた工場就労こそが、人間のためにも社会のためにもなるとさかんに喧伝されるが、合理化は工作機械が最高度に効率よく生産するための秩序であるがゆえに、労働者はそのために配置される物体にすぎず、工作機械に仕え、工作機械のスピードに合わせた時間を過ごし、容赦ないシステムに曝され、労働者どうしは細切れな作業によって分断され、ますます疲労困憊し、心の奥底に真空を忍ばせる。ヴェイユにしたがえば、人間を労働の過酷さから解放するはずの合理化こそが、はからずも労働の隷属性を白日のもとに曝すのである。

かくて、ヴェイユは『根をもつこと』でこうのべるにいたる。

> 労働者の権利要求のうちに彼らの不幸の治療方法を探すことはできない。想像力をはじめ身も心も不幸のなかに浸かっている彼らが、どうすれば不幸の烙印の押されていない状態を想像できるというのか。不幸から逃れようと奮闘しても、黙示的な夢想に堕ちていくか、国家帝国主義と劣らず奨励しがたい労働者帝国主義に埋めあわせを求めるか、そのどちらかだ。
>
> 労働者の権利要求のうちに探しうるのは、彼らの苦悩の兆候である。ところで権利要求のすべて、あるいはほぼすべては根こぎの苦しみをあらわす[24]。

労働の隷属性に打ちのめされ、その不幸を身をもって体験したヴェイユは、労働者がたやすく虚言に堕ちていく姿を見たし、自身も経験した。労働者が至高の支配者になるという確信をもたらしたマルクス主義も、テイラー式の合理化がやがて人間に労働からの解放をもたらすという夢も、国のためという陶酔をもたらすヒトラー式の国家帝国主義も、空虚を抱えた労働者にとって強烈な誘惑となる。虚言によって空虚を埋めつくす誘惑に対する舌鋒するどい政治批判はヴェイユ思想の真骨頂のひとつであるが、労働者教育を軸にみるならば、引用後半部分に着目すべきだろう。ヴェイユはなんらかの解決策を模索し権利要求する労働者のなかに根こぎの苦しみの印を見た。すなわち、労働者自身が抱える空虚、労働がもたらす不幸や隷属性そのものを見つめることに焦点が定められているのである。ならば、ヴェイユの構想する労働者教育も、誘惑に堕ちていく労働者を誘惑に堕ちないようになんらかの形で鍛える方向性にむかうはずはなく、労働者が抱える屈辱、不幸の甘受にむかっていった。

4　カトリック青年労働者連盟（Jeunesse Ouvrière Chrétienne：JOC）

工場就労をへて、ヴェイユは労働の隷属性と不幸の神秘を確信した。今度は、労働がもたらす空虚とそれに対する沈黙を感じとる感受性をどう育むのか、また、労働がもたらす空虚を虚言で埋めず、その空虚に同意することとはいかなる事態であり、それをどう労働者に伝えるのかが課題になる。この課題に対して、ヴェイユにとって、いわばモデルケースとなった団体がカトリック青年労働者連盟（Jeunesse Ouvrière Chrétienne：以下JOC）である。

JOC[25]はピオ11世が提唱したカトリック・アクションの流れを汲み、1924年にベルギーのジョゼフ・カルディン神父によってはじめられた運動体である。フランスでは1927年ころにゲラン神父が「女子カトリック青年労働者連盟」をジャンヌ・オベールとともにはじめたのを皮切りに、その後「カトリック青年学生」や「カトリック農業青年」など数々の団体が設立された。カトリック・アクションそのもののはじまりは1830年代の産業革命期に遡り、カトリック教会が低賃金労働者に対して働きかけた社会カトリシスムに起源をもつ。当時の社会カトリシスムはアルベール・ド・マンによって創設されたカトリック労働組合に代表されるように、フランス革命後の1791年に解体されたかつての同業組合の復活やパトロナージュ的な家父長制の価値観をもつ保守的かつ教権的な色彩が濃かった。その色彩を帯びたまま、社会カトリシスムは1891年のレオ13世の「レールム・ノヴァールム」によりお墨付きを得て、教会公認の流れになっていった。

JOCはこうした流れのなかにあるものの、ピオ11世の打ち出したカトリック・アクションは19世紀のカトリック教会が労働者性を喪失していたことを認めることからはじまり、カトリック教会のほうが労働者に近づくものへと変わるということを打ち出した。JOCの目的は①青年労働者の教育②青年労働者への奉仕③青年労働者の主張の３点にある。これまでの教会の方法と異なる点として、従来の教会が就労時間外の時間帯で労働者と接触したのに対し、JOCは労働者の現実の職場で起こる問題そのものに眼をむけたことが指摘されている[26]。JOCの活動から、フランス国内の労働者階級の伝道活動として「パリ伝道会」が設立され、さらには司祭たちによって教区を離れて自由に労働者と向き合う運動が生まれていった。ゴダン神父に代表されるように実際に工場で働き、労働組合運動に参加する労働司祭が登場したのもこの潮流においてであった。

ヴェイユとJOCの関わりはヴェイユがロアンヌで教鞭をとっていたころに遡る。1933年の11月ごろと目される母セルマへの手紙[27]で、ヴェイユは学内で宣伝している「女子青年カトリック学生連盟（Jeunesse Étudiante Chrétienne Féminine）」の小冊子を買って送ってほしい旨を伝えている。この団体がカトリック思想をリセの生徒たちに浸透させているとヴェイユは警戒し、資料収集を望ん

でいたようだ[28]。つぎにヴェイユがJOCに接触したのは、亡命中のマルセイユだった。1941年３月30日のJOCの会合に参加したヴェイユは心動かされ、JOCについての記事を二つ残している[29]。

マルセイユ期のヴェイユはJOCに限らず、カトリックやインド思想、東洋思想、カタリ派、禅などの幅広い宗教思想の思索をふかめた時期でもある。工場就労で得た隷属性と空虚という問題に直面したヴェイユが宗教的な思索を求めたということもあるが、ヴェイユの思索のスタイルはいつも現実的なつながりのなかで構築されていた。カトリック社会との交流については、兄アンドレの友人の数学者ピエール・オノラとその妹で熱心なカトリック信徒のエレーヌ・オノラとの出会いが大きい[30]。エレーヌ・オノラを通じて、ヴェイユの霊的指導者であり対話者となったジョゼフ・マリ＝ペラン神父と出会い、ペラン神父を通じて農業従事者であり哲学者のティボンと出会うことになった。ペラン神父とヴェイユの初邂逅は1941年６月であるため、JOCとの交流のほうがペラン神父との出会いよりも早かったことになる。

JOCの会合に出たヴェイユは『カイエ・ドゥ・シュッド』に寄せたコラム「JOCの人びと[31]」において、その会合で得た感動をあますことなく伝えている。いかなる陶酔とも、スローガンとも、若者に対する追従とも無縁な雰囲気でこの会合はおこなわれ、参加した若い労働者たちが労働の隷属性とその空虚さに日々打たれつつも、キリストが労働者であることを選んだというその意味に心震わせる姿に、恩寵のはたらきをヴェイユは見出した。

> JOCで表現されているのは純粋な労働者の精神である。そこには外部からの混ざりものはなにもない。政治も浸透していない。宗教そのものも翻訳された形でしか浸透していない。少年たちは自分たちを圧迫し、毎日自分たちを服従させるものが、経済的システムや工場主たちどころではなく、物質そのものだということ、すなわち彼らが日々長時間にわたり、疲労困憊しながら指示通りに扱うこの物質だということを感じとった。物質はたえず身体と思考を工場のなかで圧迫するので、堕落にあらがうことはほぼ不可能である。彼らは他の人びとよりも物質に従属させられている。しかし彼らがみずからのことを意識するやいなや、彼らは他のだれよりも自分たちが物質に従属させられていることを感受するのである。これこそ内的な優越性である。
>
> 彼らはキリストが労働者であることを選び、かくてこのうえないほど完全に受肉したことに、言葉にならないほど感動し心弾ませる。彼らのあいだでは、キリスト教こそがその真正なる調べ、すなわち奴隷に超自然的な自由をもたらすあの調べをもつのである。過酷で、暴力的な工場の生活において、キリスト教の精神は真にそうあるものとして、ひとつの超自然的なものとして、ひとつの奇蹟として、ひとつの恩寵としてつねに現れるのである[32]。

この「労働者たるキリスト」がJOCの若者たちを力づける。工場就労における過酷さにとどまらず、この世に存在すること自体が必然性に服する奴隷であるという真理、このことをJOCの青年たちは知る。しかし、キリストが自分たちと同じ労働者であるということがこの奴隷状態に差し込まれるのならば、もはや空虚な気持ちや倦怠感をなにかで埋める必要など寸分ももたずに、もっぱら必然性に服することに同意する。このことは、ヴェイユが『根をもつこと』でのべた「労働は牢獄の一種ではなく、この世界と他の世界との接触である(33)」に呼応する。この世界で物体として服する必然性との接触は、他の世界である「超自然的なもの」との接触にほかならない。

「この世界と他の世界の接触」は教室では教えることができない。ヴェイユは福音書や世界の諸宗教、伝承文学に散りばめられる「この世界と他の世界との接触」の逸話に労働者教育の可能性をみた。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネ12：24）は死と生が交差するヴェイユのお気に入りのたとえ話のひとつである。播種作業に従事しているときにこのたとえ話に思いをはせるならば、種を地中に埋めることと、暗い地中に埋められた種が太陽の光を得て天空に向かって上昇すること、すなわち、下方に向かうエネルギーと上方に向かうエネルギーという矛盾する二つの動きが播種作業において一つのことになる。矛盾を含む物語を介して、日々繰り返しの連続であり営々とつづいていく農作業のひとつひとつに美と詩情の霊感が吹き込まれるのである。ヴェイユが構想する労働者教育は労働の美にほかならない。

おわりに

ヴェイユの労働者教育はマルクスやマルクス周辺の論者と異なる方向にむかう。ヴェイユはマルクスの分析にきわめて大きな影響をうけたが、労働者教育に関しては、マルクスに依拠するのは知的労働と肉体労働の分割に関する分析にとどまり、マルクス思想の代名詞ともいえる労働者の解放を掲げる革命思想に与しなかった。そもそも労働からの解放をめざさなかった。本稿で検討したとおり、ヴェイユの労働者教育を決定づけたのは工場就労で刻印された労働の隷属性だった。労働の隷属性は人間が他の事物と同様に自然の必然性に服している証なのであり、逃れようのない事実なのである。労働における必然性は工場就労の体系や工作機械との関係により、より苛烈なものとなって労働者に迫り、不可解な神秘と化して労働者を沈黙させる。ヴェイユのめざす労働者教育はこの屈従や屈辱の治癒であり、労働者への敬意の涵養なのである。ゆえに労働がもたらす神秘と向き合い、霊性の方向へとむかっていった。

本論では、ヴェイユの労働者教育の中枢たる労働の霊性が出てくる基盤の一端を探るために、（1）ヴェイユの労働者教育の基礎を準備したもの、（2）労働者

教育に決定的な影響を及ぼした工場就労、（３）カトリック青年労働者同盟（JOC）の三つを支点に検討した。今後はさらに細部を取り上げ、ヴェイユの労働者教育構想の解明を試みたい。

付記：本研究は2022年度科学研究費基盤（C）「シモーヌ・ヴェイユにおける労働者教育の変遷」課題番号（22K00041）の成果の一部である。ここに謝意を表する。

（１）この「カトリシスムとの三度の接触」については、マルセイユでヴェイユが親交をもったドミニコ会修道士マリ＝ペランに向けて書いた手紙に詳しい。ヴェイユの「霊的自叙伝」と呼ばれるこの手紙はヴェイユが渡米するために経由したカサブランカの難民キャンプへ向かう直前にペラン神父に預けられ、他の手紙と数編の神に関する論考とあわせて『神を待ちのぞむ』として1950年にペラン神父によって出版された（『シモーヌ・ヴェーユ著作集Ⅳ』所収、渡辺秀訳「神を待ちのぞむ」春秋社、1967年）。この「霊的自叙伝」において、ヴェイユは「カトリックとの真に重要な三度の接触」についてペラン神父に告白している。一度目は、工場就労の直後に両親に連れられて出かけたポルトガルの漁村で出会った漁村の女たちが歌う古い聖歌を聞いたときにキリスト教が奴隷の宗教であり、みずからもそのひとりであることを直観したことである。二度目は1937年のアッシジで、アッシジの聖フランチェスコがしばしば祈ったとされる教会ではじめてひざまずいたときのことである。三度目は、1938年のスペインのソレムのベネディクトゥス修道会で得たキリストの受難との一致である。これら三度の契機はヴェイユ晩年の思索で表面化する「愛と不幸」と重なり、三度の契機を経る前後にヴェイユの思想において決定的な相違があるとみなされることもあるが、ヴェイユの全生涯そのものにおいて同一性が指摘されることもある。

（２）フロラン・ド・リュシー『シモーヌ・ヴェイユ』神谷幹夫訳、白水社、2022年、28頁。

（３）Simone Weil, *Œuvres Complètes*, TomeV, Volume2, Écrits de New York et de Londres, Gallimard, 1997, pp.144-145.

（４）*Ibid*., p.144.

（５）*Ibid*., p.187.

（６）*Ibid*., p.188.

（７）*Ibid*., p.188.

（８）Patrice Rolland, «Le Syndicalisme Révolutionnaire», Charles Jacquier, *Simone Weil, L'Expérience de la Vie et le Travail de la Pensée*, Sulliver, 1998.

（９）シモーヌ・ペトルマン『詳伝　シモーヌ・ヴェイユⅠ』杉山毅訳、勁草書房、1978年、88-89頁。およびフロランス・ド・リュシー『シモーヌ・ヴェイユ』神谷幹夫訳、白水社、2022年、23-25頁。

（10）シモーヌ・ペトルマン前掲書、142頁。およびジャック・カボー『シモーヌ・ヴェーユ伝』山崎庸一郎・中條忍訳、みすず書房、1974年、39頁。

（11）カボー前掲書、44-45頁。

（12）カンクエの民衆大学については、ペトルマン前掲書、88-89頁およびカボー前掲書、32頁を参照。

（13）ペトルマン前掲書、82-84頁。

(14) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, Tome I, Premiers Écrits Philosophiques, Gallimard, 1988, p.116.
(15) 労働取引の設立経緯およびその後の発展についてはつぎの二つの論文を参照した。
大森弘喜「19世紀フランスにおける労使の団体形成と労使関係」『関東学院大学経済学会研究論集』第227集、2006年、20-52頁。
Patrice Rolland, «Le Syndicalisme Révolutionnaire», Charles Jacquier, *Simone Weil, L'Expérience de la Vie et le Travail de la Pensée*, Sulliver, 1998.
(16) Simone Weil, La Condition Ouvrière, Gallimard, 1951, p. 125.
(17) ヴェイユの工場就労がその後の哲学におよぼした影響についてつぎの著作を参照した。
Rober Chnavier, *Simone Weil Une Philosophie du Travail*, CERF, 2001.
(18) Simone Weil, *La Condition Ouvrière*, Gallimard, 1951, p. 21.
(19) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, Tome II, Volume 2, Écrits Historiques et Politiques, L'Expérience Ouvrière et l'Adieu à la Révolution, Gallimard, 1991, ms92, p.253.
(20) シモーヌ・ペトルマン『詳伝　シモーヌ・ヴェイユⅡ』田辺保、勁草書房、1978年、270頁。
(21) Simone Weil, *La Condition Ouvrière*, Gallimard, 1951, p. 241.
(22) *Ibid*., p. 261.
(23) *Ibid*., p. 223.
(24) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, TomeV, Volume2, Écrits de New York et de Londres, Gallimard, 1997, p.152.
(25) JOCおよびカトリック・アクションについては村山盛忠「フランス労働司祭運動（1941-1954）——その歴史と課題」（『基督教研究』36巻２号、キリスト教研究会、1971年、126-154頁）およびJoseph Debés, *Naissance de l'Action Catholique Ouverière*, Les Éditions ouvrière, 1982を参照した。
(26) 村山、128頁。
(27) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, Tome IV, Volume1, Écrits de Marseille, Gallimard, 2008, p.140.
(28) ペトルマン前掲書、287頁。カボー前掲書、104頁。
(29) カボー前掲書、253頁。
(30) シモーヌ・ペトルマン『詳伝　シモーヌ・ヴェイユⅡ』田辺保、勁草書房、1978年、241頁。
(31) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, Tome IV, Volume1, Écrits de Marseille, Gallimard, 2008, p.413.
(32) *Ibid*., p.413.
(33) Simone Weil, *Œuvres Complètes*, TomeV, Volume2, Écrits de New York et de Londres, Gallimard, 1997, p.187.